



日本神の教会連盟
CHURCH OF GOD JAPAN

第261号
2009年 夏号

神の教会



せいひつ 静謐への希求

空知太栄光キリスト教会 牧師 銘形 秀則

を知ることが今求められて
います。それはいのち
の源泉に向かう渇きであ
り、希求です。

◆「静謐さ」―それは神

◆日本の宣教は今や150周年を迎えようとしています。しかし今の日本の教会の霊的な現況は行き詰まり感がいよいよ強め、停滞から衰退へと向かっていく感じがします。このような現況に私は大きな危機感を覚えると同時に、いたずらに宣教への対応策を練り、働きへと煽り立てることは、力の喪失をより早めてしまうようにも思います。むしろ、「わたしにとどまりなさい。・・わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」(ヨハネの福音書15章4節、5節)と言われた主のみことばの真意を正しく、そして真剣に受けとめる時なのだと思えます。「主にとどまる」とは、「やめよ(口語訳では「静まって」)。わたしこそ



銘形 秀則 師

神であることを
とを知れ。」
(詩篇46篇10
節)という
ことばを悟
ることです。
静まること、
静謐の価値

の源泉は御父との親しい交わりに身を隠すという祈りの生活でした。イエスの弟子たちと同様に、私たちもそこに気づきが与えられなければなりません。

◆しかし、たとえ気づきが与えられたとしても、どのようにその祈りのライフスタイルを築いたらよいか分からずにいるというのが今日のクリスチャンたちの問題点のように思います。マルタスタイルからマリヤスタイルへ―それは決して簡単なことではありません。なぜなら、意識的な生活改革が私たちに求められるからです。

◆この2月に連盟の牧師会が奥多摩でもたれました。「静まりのセミナー」を主催する太田和功一氏が講師として招かれました。「霊性の回復と開拓伝道のスピリット」という連盟の新たな方向性を探るための第一歩の企画であったようです。霊性の回復はきわめて個人的であると同時に、きわめて共同体的な取り組みだと信じます。連盟にある諸教会が、共に、クリストにある霊性を再発見しながら、互いにそれを分かち合っていけるようなかわりを築けるかどうか、そこに連盟の将来を見据える鍵があるように思います。

との親しい愛の交わりを豊かにし、深め、それを十分に楽しむために必要な要件です。主のために生きようとしている多くのクリスチャンたちの生活は、あのマルタのように奉仕のために気が落ち着かず、多くのことに気を使い、それに自ら支配されてしまっています。しかし私たちは今、マリヤのように「主の足もとにすわって、みことばに聞き入る」というライフスタイルの大切さに気づき、それをいかに自らの生活の中で確立するかが問われています。この問いに対する取り組みが、その人の霊性となっていきます。主イエスは「どうしても必要なことはわすかです。いや一つだけです。マリヤはその良い方を選んだのです。」(ルカの福音書10章38、42節参照)と言われましたが、マルタの奉仕もマリヤの静まりも両方大切だと解釈してしまうなら、ここで主が言わんとしたメッセージは骨抜きにされます。マリヤのライフスタイルはまさに主イエス自身の生き方でした。主イエスの生涯のすべ